



カンタン

カンタン（邯鄲）は、コオロギ科に属する昆虫。
クズ、ヨモギ、ススキなどが多い草地に生息します。
鳴く虫の女王といわれ、透明な羽を立てて、ルールーと鳴きます。
和名は、中国の古都邯鄲から来ています。とても美しい鳴き声と
透き通るような半透明の姿や成虫としての短い寿命を栄枯盛衰
や儚さに例えて名づけられたそうです。

目 次

巻頭言

「言語活動の充実を図るために」	小田原市教育研究所 所 長	2
1 小さなころみ		
「新学習指導要領に対応した学習指導について～小学校～」		
「小学校学習指導法」に関する研究員		3
2 小さなころみ		
「新学習指導要領に対応した学習指導について～中学校～」		
「中学校学習指導法」に関する研究員		4
3 学びの架け橋		
「学習意欲を喚起する教材や学習活動のあり方と小中の連携」		
～社会との関わりを実感し、自らの生き方を問う社会科教育をめざして～		
社会科 プロジェクト研修員		5
4 学びの架け橋		
「小・中が連携した英語教育の実践・研究」		
外国語・外国語活動プロジェクト研修員		6
5 ある教室から		
「算数って楽しい。おもしろい。すばらしい。」と思える授業を		
教育指導課 指導主事		7
6 研究所だより	教育指導課 指導主事	8

言語活動の充実を図るために

小田原市教育研究所所長



小田原市教育委員会の機構改革に伴い、今年度から教育研究所は教育指導課に所属することになり、学力向上や不登校対策、特別支援、教育相談、地域一体教育などに教育指導課の指導主事等の教育専門職が専念できるように体制が整備されました。教育相談や不登校対策などは新たに設けられた相談担当が主に所管し、教育研究所は教職員の資質の向上をめざす「教職員アカデミープラン」に基づき、今日的な教育課題へ対応する共同研究などの教育課程研究事業、専門性や指導力向上をめざすパワーアップ研修などの研修事業、国の学力調査の結果分析等を行う検証委員会、そして教育ネットワーク整備事業、刊行・教育情報事業などが主な所管事業となりました。今後とも皆さんのご協力をいただき、これらの事業の充実を図っていきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

さて、子どもを取り巻く環境が大きく変化する中で、子どもの学ぶ意欲や生活習慣の未確立に起因する学力低下や規範意識の低下の問題が指摘されています。昨年、告示された新学習指導要領にもこれらの課題の改善に向けて指導すべき内容が示され、今年度から各学校・園ではその取り組みがすでに始められていることと思います。

先日ある教育誌に、子どもたちが発する言葉が「先生、トイレ」などのように断片的で、またそれが授業中に見られる、という事例がでていました。先生は、その子どもに対して聞き返し、先生はトイレでないことを気づかせ、きちんとした言葉に言い直させるために粘り強く対応されているとのことでした。言葉の問題については次のような内容の教育資料にも目がとまりました。東京大学 PISA 国際研究会で国立教育政策研究所の有元秀文先生が講演した内容で、「欧米人が日本人と会議

すると、黙っている日本人が多いのに驚く。この沈黙の文化と PISA の自由記述問題の日本の生徒の無答率の高さは無縁でない。ふだんから何でも思ったことを自由闊達に表現する訓練をしていないから、自由に表現ができない。」と問題点を指摘しています。

新学習指導要領では、「言語活動の充実」がうたわれ、国語をはじめ各教科等で、記録、説明、批評、論述、討論などの言語を使った活動を行い、すべての教科等で言語の力を育むとなっていますが、子どもたちにとって、まずは自分の考えや思いを積極的に表現できる環境づくりや情意面への配慮が大変重要になってくるように思います。さきほどの有元先生は講演の中でさらに、「沈黙の文化とさよならするためには、発言させない原因を取り除かなければならない。発言を押さえつける大きな原因は、発言したことについて陰で批判したり陰口をたたく習慣である。言いたいことがあれば、面と向かって、率直にしかも相手を傷つけないで言えるコミュニケーションスキルを身につければ陰口はたたかなくなる。」と言い、対話をする上での約束事を身に付けさせることの必要性を述べています。

人は他者との対話を通して自己を表現し、考えを明確にし、あるいは他者を理解し、他者と意見を共有し、お互いの考えを深めていくと言われています。また他者の話に耳を傾けることは、お互いの関係を作る上での基本でもあります。求められる「言語活動の充実」を図るためにも、子どもたちがお互いに尊重しあい助けあい、安心して発言や表現できる学級の雰囲気が必要であると思います。そして先生自らが子どもたちと豊かなコミュニケーションを率先して行っていくことが大変重要になってくるように思います。



「小学校学習指導法」に関する研究員

1 はじめに

平成23年度から「新学習指導要領」が、完全実施される予定です。指導内容が各学年によって変更されると同時に、指導法についても改めていかなければなりません。特に「基礎的・基本的な知識・技能の習得」、並びに、「それらを活用し課題解決をするために必要な思考力・判断力・表現力や学習意欲等の育成をバランスよく推し進めていく学習指導」が大切になってきます。

従来の指導法の何を今後も生かせるのか、また、どんな点を変えなければいけないのか考える必要があります。

2 研究内容

まず私たちは、「新学習指導要領の目指すもの」について書かれている文献を読み深めていくことにしました。その内容を検討した結果、私たちが大切にしていかなければならない指導上の留意点を見つけることができました。それは「言語活動を充実させること」「習得・活用・探究のバランスを図ること」「体験活動を充実させること」「道徳教育と関連させていくこと」などです。

これらを踏まえて、4人の研究員は平成20年度に様々な教科で研究授業を行いました。算数科では5年の「面積の求め方を考えよう」、体育科では5年の「プレルボールを楽しもう」、図工科では4年の「わたしの成長・10歳のわたし（木版画）」、生活

科では2年の「大きくなったよ」です。各実践後には研究協議を行い、指導法による児童の変化から成果や課題について話し合ってきました。そのことによって、学習のルールを徹底させることやクラスの雰囲気作り、児童の主体的な活動が見られるような単元構成、指導形態の工夫などが確認されました。

3 今後の取り組み

今年度も、今までの研究をいかして国語や音楽など他の教科でも研究授業を行い、さらに研究を深めていく予定です。そして、年度末には今までの実践を「指導事例集」のような形で報告しようと考えています。

現場の先生方にとって、23年度からの完全実施は不安や悩みが多いかと思いますが、この事例集が「新学習指導要領」の実践の一助となれば幸いです。





「中学校学習指導法」に関する研究員

1 はじめに

平成24年度から新学習指導要領が本格実施されます。今回の改訂では、習得・活用・探究が学習指導の大きな柱となっています。そこで私たち中学校の研究では、その基本的な考え方である「基礎的・基本的な知識及び技能の習得、並びに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力や学習意欲等の育成をバランスよく推し進めていくこと」をめざした学習指導法を研究することとしました。特に、教科横断的な考え方（クロスカリキュラム）による授業づくりに視点を当てることを研究の切り口として取り組みました。

2 研究内容

私たちの研究は、昨年度（平成20年度）から始まり、今年で2年目になります。1年目の研究では、まず、梶田叡一中教審教育課程部会会長による「学習指導要領改訂の経過とねらい」や高橋道和文部科学省初等中等教育局教育課程課長による論文「新学習指導要領がめざすもの」を参考に、新しい学習指導要領の基本的な考え方を学ぶ理論研究からスタートしました。続いて、各教科・各学年の年間指導計画を持ち寄り、クロスカリキュラムの可能性を探りました。特に、習得した知識・技能を活用することを念頭に置いた、複数教科を関連させた単元構成を考え、「言語活動の充実」の視点も反映させながら、指導案を作りました。

た。（その際に参考とした文献は、「教えて考えさせる授業を創る〈市川伸一著〉」「『活用力』を育てる授業の考え方と実践〈安彦忠彦著〉」「習得・活用・探究の授業をつくる〈横浜国立大学附属横浜中学校編〉」）その後、指導案検討を行い、各研究員による実践の授業研究を行いました。具体的な授業の実践内容としては、家庭科では、「安全で快適な住まい方の工夫」の単元で、理科の「ゆれる大地」の内容を使った授業実践を行い、社会科では、「消費者の権利と保障」の単元で、家庭科の「商品の選択と購入」を活用した授業実践を行いました。また理科では、「ゆれる大地」の単元で数学科の「比例」の単元内容を使った授業実践を行い、数学では、「図形の証明」の単元で、理科の「光の反射」を使った授業を行いました。そして、各授業後の協議では、成果と課題を明らかにすることにより、お互いに研究を深めることができました。

3 今後の取り組み

研究2年目の本年度は、各教科で昨年度とは違う単元での授業実践を行い、その後に総合的な考察をし、最終的に実践事例集として今までの研究をまとめていきたいと思っています。そして、この研究が、少しでも先生方の授業づくりの参考になればと思います。



社会科部会ではそれまでのテーマに加え、昨年度より「小中の連携」とサブテーマ「社会との関わりを実感し、自らの生き方を問う社会科教育をめざして～」を設定し、研究をすすめてきた。

昨年度のとりくみは…

昨年度は、情報交換から始めた小中の連携を中心とした研究の中で、小中一貫カリキュラムの検討や小中一貫校のとりくみなども話題にのぼったが、共通理解できたことは次の2点である。①小学校での学習がある事例にスポットをあてつつ、体験的・集团的・作業的なものが多いのに対し、中学校では流れを重視する系統的な学習であり、講義形式が一般的であること、②その上で、小学校で学んだことを中学校にいかにつなげていくのか（＝小学校では中学校で学習することを見通して、中学校では小学校で学習したことをふまえて）を小中連携のスタートとすること、である。

授業研究では…

そこで、10月の研究授業では、中学校の歴史学習（戦時下の国民生活）をテーマに、小学校で学習したことを生かしつつ、その深化を図ることをねらいとした授業を行った。

国民の生活が苦しくなっていく様子を4枚の写真を正しく並び替える作業を通して理解することが授業の中心であったが、これを生活班で行うことで、より学習意欲を喚起させようとするものであった。授業は非常に活発なものとなったが、生活班（6～7人）よりも3～4人の班編成がのぞましい、「自らの生き方を問う」要素が足りない、

などの課題のほか、生徒の事前のアンケートでは小学校での学習内容があまり定着していないという実態もあり、小中連携の必要性を実感させられたものとなった。

今年度のとりくみは…

今年度は昨年課題をふまえ、次の3点を柱に研究をすすめ、そのまとめとして小学校での授業研究を2月に行う予定である。

①言語活動を重視した授業形態での学習の研究 ②子どもたちが学習によって得た価値観をはっきりと認識できるような教材開発 ③小学校で学習した内容を中学校でどのように生かしていくのか、をふまえた小中連携の研究

①は新しい学習指導要領、②は「自らの生き方を問う」③は小中連携、それぞれに関わるテーマである。とりわけ②は「教師自身の生き方」を問うものであり、歴史学習でいえば「過去の歴史から学ぶ」ために私たち教師ができることは何か、を追求することでもある。

このプロジェクト研修の成果が、小中の連携と交流（とりわけ教員間の）を深めることの契機となり、それによって「社会科は暗記の教科だからきらい」という子どもたちを少しでも減らし、「未来を考える教科だから楽しい」と感じることでできる子どもたちを増やすことの一助になることや、将来的に9年間のカリキュラムの作成等につながることを期待し、今後も研究をすすめたい。



プロジェクト研修研究員（外国語・外国語活動）

はじめに

「小学校での英語活動のために、中学校教員にできることは？」そんな発想から中学校教員お二人によって17年度にスタートした。小学校に本格的に英語活動（新指導要領で外国語活動に）が導入されるということで、小学校教員2名が新たに加わり小・中連携の形が整ったのが19年度である。そして、3年目である21年度、本研究のまとめの年を迎えた。

これまでの研究の流れ

- 17年度：市内小学校の外国語活動実態調査から、取り組みの差こそあれ、多くの小学校で外国語活動に取り組んでいる現状をつかむことができた。
- 18年度：中学校教員による小学校での授業実践。
- 19年度：小学校教員の情報、発想を生かした指導案を作り、中学校教員による小学校での授業実践。「教える授業」と「慣れ親しむ活動」の違いを実感する。
- 20年度：小学校教員をT1とし、中学校教員がT2としてサポートする授業実践。「英語ノート」をもとにしたレessonプラン作り。
- 21年度：小学校担任主導のレessonプランの作成、授業実践。

小学校担任主導の授業を！

～中学校教員の専門性と経験を生かして～

昨年度は、①慣れ、親しむ活動をねらいとし、多彩な活動を繰り返す中で（パターン・プラクティスに陥らないように）、子どもたちが英語表現を使えるようにする。②小学校での「外国語活動」開始を踏まえ、小学校教員（担任）主導の活動とする。この2点を課題として研究を進め、小学校担任の持っている情報（クラスの様々な実態）と中学校教員の情報（専門性や経験）を交換し合いながらレessonプランの作成にあたった。

「数で遊ぼう」How many～？を題材とした公開授業では参観者の皆さんから次のような評価をいただいた。「1時間の中で場面を変え子どもたちを飽きさせずに、How many～？を何回も言わせてしまう工夫があつてよかった。」「笑顔の絶えない、子どもたちにとって楽しい時間になっていた。」「子どもたちの認め合い、友だちを再評価する場面も見られ、コミュニケーションの素地を養うという意味でよい活動になっていた。」

小学校教員は、外国語活動を進める上で大きな不安を抱えている。しかし、昨年度の実践のように、中学校教員の専門性、経験を味方に進めていけると力強い。各中学校区に取り組みが広がっていくとより有意義なものになっていくだろう。

本年度は、いよいよ小学校担任主導（一人で）の外国語活動に挑戦・・・。



「算数って楽しい。おもしろい。すばらしい。」と思える授業を

教育指導課指導主事



「さあ、冒険の始まりのステージです。
今日は残りの二つの宝石をさがしましょう。」

「使えるアイテムはなんでしたか。」

小学校3年生の算数「四角形を調べよう」の学習が始まりました。今日は、長方形についての定義や性質について学んでいきます。

目を輝かせて先生を見つめる子どもたち。ペアで協力しながら、“図形マスター”を目指して冒険（授業）を進めていきます。ひとは、先生が提示した図形(宝石)を見て、友だちが袋の中から同じ図形を選ぶことができるように一生懸命ヒントを考えます。三角定規を当てて直角かどうかを確かめたり、辺の長さを測ったり…。子どもたちが、自分の考えを持ちながら学習できるように、先生が支援します。

考え終わったところで友だちのもとへ。今度は、ヒントを聞きながら、袋の中から、手探りで図形(宝石)を探し出します。間違えないように、友だちに質問をしながら。教室に、「頂点が…」「直角が…」「向かい合った辺が…」などという言葉があふれました。夢中になって取り組む算数の授業。そこには、教師のさまざまな工夫がありました。

ペアで協力して、長方形、直角三角形などのステージをクリアして、“図形マスター”になるという目標に向かって、ひきだされた「やってみたい」という子どもたちの意欲。さらに子どもの興味を引

き出す算数的活動によって、「伝えたい」「解決したい」という思いが生まれました。そして、自分が何とか解決しなくてはならないという必要感を子どもたちは持つことができました。目を輝かせて取り組む子どもたち。

また、“アイテム”という言葉で整理された既習事項を使ってヒントを出さなくてはならないというルールにより、子どもたちは、自然と辺、直角といった言葉を使って図形を表現していました。そして、活動を繰り返す中で、これらの言葉を習得するとともに図形を構成要素で表現することのよさや便利さ、既習事項を活用することのよさ、表現する楽しさを子どもたちは実感していきました。

さらに、子どもたちの実態を十分に把握した上での教師の支援。工夫された掲示物であったり、お助けカードであったり、適切な言葉かけであったり。自分の考えをしっかりと持って取り組む子どもたち。

算数・数学的活動の一層の充実が求められる中、この授業は、子どもたちが目的意識を持って主体的に取り組み、「算数って楽しい。おもしろい。すばらしい。」と感じられる授業を行っていくことの大切さをあらためて教えてくれました。



研 究 所 だ よ り



教育研究所では、今年度も、研究・研修などの所管事業を充実させる運営を心がけ取り組んでいきますので、よろしくお願いします。

◆「小田原の自然」活用講座◆

教育研究所の事業の1つに「自然観察会」があります。研究所の刊行物である「小田原の自然」活用講座として、小・中学校の教員等を講師に迎え、年間8回実施しています。

平成21年度自然観察会

実施日・場所	講座名・内容
4/11 (土) 富水～桑原	平地の自然 あぜ道の花や虫そしてメダカ
5/23 (土) 江之浦海岸	海岸の自然 磯の生物を観察しよう
6/6 (土) 市役所周辺	ツバメの観察会 ツバメの観察・調査
6/20 (土) 報徳橋付近	河原(酒匂川)の自然 河原の岩石
7/11 (土) 辻村植物公園	丘陵の自然 夏の虫を探そう
10/10 (土) 石垣山とその周辺	山地の自然 山や花や鳥を探る
11/7 (土) 下曽我(千代台地)	小田原の地形 地質・地形を調べよう
1/16 (土) 酒匂川水系	酒匂川の野鳥 カモをみよう

今まで何気なく見ていた小田原の自然。自然観察会に参加することにより、新たな気づき、新たな発見があります。



参加した小・中学生の目の輝き。そして、大人も……。小田原の自然を見つめるよい機会となっています。

小・中学校教職員の参加もお待ちしております。

◆教育講演会より◆



8月26日(水)、小田原市、足柄下郡の幼稚園、小・中学校の教職員のみなさんを対象に、教育講演会が開催されました。

今年度は、明治大学文学部教授 諸富祥彦先生をお迎えし、「教師の元気をパワーアップ」という演題で、ご講演をいただきました。

カウンセリング心理学、心理療法等がご専門で、教師を支える会代表をなさっている先生からは、不登校防止をねらった「夏休み明け3日間で行いたいエクササイズ」や「教師の4つの悩みへの対処法」などを、演習を含めながら楽しくお話しいただきました。

途中、参加者が壇上にのぼるなど、今までにないスタイルの講演はとても新鮮であり、身近な仲間と語り合える素晴らしさを、体験を通してご教授いただきました。

小田原教育 第111号

発行日 平成21年10月9日(金)

発行所 小田原市教育研究所

発行者 所長 小泉 信二

〒250-8555 小田原市荻窪 300

電話 33-1730

研究所ホームページアドレス

http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/kyouiku_ken/index.html